



Tohoku Univ.
Dept. Hematology
and Rheumatology

血液免疫科 ニュースレター

Vol. 25
(2018年5月)

【発行元】 東北大学 血液・免疫病学分野 (東北大学病院 血液免疫科)
Address: 〒980-8574 仙台市青葉区星陵町1-1 Tel: 022-717-7165 / Fax: 022-717-7497
Homepage: <http://www.rh.med.tohoku.ac.jp/>

巻頭言

今年が駆け足で過ぎて、すっかり初夏の様相となりました。新たな年度となり、医局も新たなメンバーが加わってにぎやかなスタートを切りました。新年度最初の号の恒例として、今回は新人紹介をさせていただきます。これから、学会、研究会、同窓会、外勤等々でお世話になることが多々あると思っておりますので、先生方には是非顔と名前を憶えていただき、ご指導・ご支援賜れば幸いです。

さて、私が好きな落語には、「転失気」、「酢豆腐」、「千早振る」といった有名な演目がありますが、これらの演目には共通点があります。それは、いずれもわからないことをわかったふりしてふるまう通人をくすぐる話という点で、「転失気」は「おなら」、「酢豆腐」は「腐った豆腐」、「千早振る」は「百人一首」を題材にしています。プライドが高くなりがちな私共医師にとって特に「あるある」的な話で、ある意味教訓的な話といってもいいかもしれません。

それはともかく、最近の「わからない」言葉の一つとして、「未来型医療」という言葉があります。先生方はこの「未来型医療」を聞いてどのようなことを思い浮かべるでしょうか？私が考えるに「未来型医療」は決して一つの決まったものではなく、あえてそれを定義づけるとすれば「医療の最適化」で、その手段がAIであり、ゲノム医療であり、タスクシフティングであり、ビッグデータであると思います。これらの手段の活用は、「医療の最適化」とともに「医療の効率化」をもたらします。この方向は決して悪いことではありませんが、一つ間違えるとヒトをパーツの集合体とみるような医療になりかねません。聴診器一つで限られた薬を手に往診をしていた時代というのは、病気の治療という点では不十分であったことは間違いありませんが、患者さんの満足度や医療の温もりといった点では現代よりも勝っていたような気がします。今後「未来型医療」が進んでいけばいくほど、患者さんを「ヒト」とみて、患者さんの笑顔を引き出せるような

今号の内容

巻頭言	p1
新入局員あいさつ	p2-3
学会報告	p4-6
人事異動	p7

医師を作り上げることが、重要になっていくでしょう。そのためには、若手医師を迎え入れる医局の環境はとても大事で、ただただテンパるのではなく、ある意味落語の落ちのように一呼吸おいて笑いでくすぐることができるような医局であってほしいと思いますし、そのような医局を醸成することが私の仕事の一つであると考えています。

OBの先生方におかれましても「北風」のような大所高所からのご指導だけでなく、「太陽」のような温かい御声援を賜りたく、今年度もどうぞよろしくお願いいたします。(張替 秀郎)



川尻 昭寿 先生（血液）

4月から入局しました川尻と申します。私は平成22年に東北大学を卒業し、その後大崎市民病院で初期研修を行い、仙台医療センター血液内科で後期研修を一年行った後、国立がん研究センターで正規レジデント・がん専門修練医として5年間研修を行い、主に同種造血幹細胞移植について学びました。張替先生・大西先生には学生時代からお世話になり、がんセンターに研修に行くか悩んだ際も相談にのっていただきました。これまで非常に偏った領域で研修し

てきたこともあり、皆様には経験不足から様々なご迷惑をおかけしてしまうことと存じますが、少しでも皆様のお役に立てるよう努力いたしますので何卒ご指導ご鞭撻いただきますよう何卒よろしくお願い申し上げます。



矢坂 健 先生（免疫）

4月から入局いたしました矢坂 健と申します。

27歳の量産型草食系男子です。

東京で生まれ育ち、本当はフランスに留学して映画監督になるのが夢だったのですが、いつの間にか仙台にいました。その後、石巻→盛岡→宮古と北上を続け、このたび4年ぶりに帰ってきました。仙台は温暖で過ごしやすくて良いなあと認識している自分に驚きつつ、新しい環境で

の生活を楽しくしています（それにしても今年は暖かいですね（笑））。

東北地方は医師不足もさることながら、医療アクセスの面でも大きなギャップがあり、これまでの経験では、「中心と周辺」という昔ながらの図式を強く意識させられることが多かったように思います。「東北の中心地」である仙台においても、個々の患者様の地理的／経済的条件への想像力を絶やすことなく診療できればと思っています。と、知ったような口をきくことが多いですが、一生懸命頑張りますので、ご指導よろしくお願いいたします。



中川 諒 先生（血液）

今年度より血液免疫科に入局致しました中川諒と申します。東京都にある虎の門病院で初期研修を行い、引き続き1年間の血液内科を中心とした後期研修を経て、4月より母校に戻ってきました。大学3年生の時に基礎医学修練で血液領域に関する基礎研究を行った事がきっかけで血液内科に興味を持ち、学生実習、初期・後期研修を通じて血液内科への想いは確固たるものになりました。血液免疫科の先生方にはSGT

や高次修練で大変お世話になり、自分もスタッフの一員として早く役に立てるよう頑張りたいと思います。まだまだ至らない点も多いとは思いますが、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願い致します。





古川 瑛次郎 先生 (血液)

今年度より血液免疫科に入局致しました古川瑛次郎と申します。平成28年東北大学医学部卒業後、山形市立病院済生館にて2年間の初期研修を行い、今年4月から後期研修医として東北大学病院でお世話になることとなりました。

血液・免疫領域は、最新の基礎研究が治療薬となって応用される最先端の領域であり、その必要な知識の膨大さ、進化する治療薬を把握する難しさに圧倒される毎日です。しかしそこに興味を持ち、や

りがいを感じ血液疾患に携わりたいと強く思い入局させていただいた次第です。

若輩者ではありますが、今後も自己研鑽を怠わらず勉学に励み、少しでも早く皆様のお力になれるように精進してまいります。ご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。



石川 祐子 さん (移植コーディネータ)

4月よりHCTC (造血細胞移植コーディネーター)として配属になりました。前職はCRC (臨床研究コーディネーター)を約10年勤めました。そのうち3年半は、当院の臨床研究推進センターで勤務しました。CRCとして複数の診療科に携わってきましたが、血液免疫科/血液グループの治験を担当することが比較的多く、自然と血液疾患に関わる仕事がしたいと考えようになりました。HCTCの存在は知っていたものの、具体的な役割は知りませんでした。配属後、実際に移植に関する業務に触れることで、ひとつずつ理解を深めているところです。日々新しいことに出会うたびに、戸惑ったり考え込んだりしながらも、皆様に助けられ進んでおります。一日も早く造血幹細胞移植推進拠点病院のHCTCとしての役割を担えるよう、励む所存です。

佐々木 志野 さん (事務補佐員)

4月9日より血液免疫科に入局させていただきました佐々木志野と申します。病院での勤務は初めての為、専門用語にまだ慣れず、いろいろご迷惑おかけする事があるかと思いますが、精一杯努めさせていただきますので、宜しくお願ひいたします。

小野寺 佐和子 さん (技術補佐員)

昨年10月より技術補佐員として入局させて頂きました、小野寺佐和子と申します。東北大学医学部小児科の血液グループで、2年弱同じように技術補佐員をしていたこともありましたがそれはそれは随分昔のことになりますので、記憶も薄れ、ほぼ初めての業務となりまだまだ未熟者です。主な業務はEBウイルスの測定に携わっております。先生方にご迷惑をおかけすることも多々あるとは思いますがこれからもご指導のほどどうぞよろしくお願ひいたします。

千葉 薫 さん (事務補佐員)

この度、血液免疫科の事務補佐員として入局させていただきました、千葉薫と申します。現在まで、事務職に就いてまいりましたが、また新たな気持ちで仕事に取り組んでいこうと思っております。そして、一日も早く仕事に慣れ、皆様のお役に立てるよう努力してまいります。今後ともご指導ご鞭撻の程、よろしくお願ひ申し上げます。





学会報告① ～医学生・研修医の日本内科学会ことはじめ2018～

本年も日本内科学会総会と同時開催の「医学生・研修医の日本内科学会ことはじめ」において、当科実習の医学部6年生が演題を発表しました。本年は過去最多の5名の学生の参加となりました。発表演題は以下の通りです。

- ◇ 笹岡 麻実 さん (指導医；市川)
「自己免疫性溶血性貧血が先行した卵巣原発びまん性大細胞型B細胞リンパ腫の1例」
- ◇ 池田 正俊 君 (指導医；市川)
「全身性エリテマトーデスの経過中に大腿に局限した節外性NK/T細胞リンパ腫を発症した1例」
- ◇ 奥田 健大 君 (指導医；福原, 市川)
「多発根神経炎で発症した血管内大細胞型B細胞リンパ腫の一例」
- ◇ 森 健太郎 君 (指導医；藤井)
「再燃時にMPO-ANCAが陽性化したANCA関連血管炎性中耳炎(OMAAV)の一例」
- ◇ 桑田 亮 君 (指導医；城田)
「非定型抗酸菌性筋炎及び多発性膿瘍を合併した抗MDA5抗体陽性皮膚筋炎の一例」

数ヶ月前から準備を進め、当日には満を持して素晴らしい内容の発表でした。例年思うことですが、自分が学生・研修医の時を考えると、みな優秀で堂々としていて、感心するばかりです。そして、本年も2名(池田君、桑田君)が「優秀演題賞」を受賞するにいたりました。

今回特に感じたのは、「ことはじめ」と謳われながら、内容は入門編ではなく、各専門分野の学会に引けを取らない高い水準の発表と討論であるということです。学生・研修医だからと妥協した内容の発表ではなく、より高度で洗練された内容の発表を行い、その発表に基づいて専門家同士の活発なdiscussionが行われるのは、とても良い刺激になったのではないかと思います。新専門医制度の発足により学生・研修医が内科を目指さなくなるのではないかと懸念が渦巻く昨今ですが、このような有意義な“early exposure”の機会を通じて、我々の分野を志すことをencourageされる若者が増えることを願ってやみません。そして来年以降も、本年同様に意識の高い積極的な学生さんが当科から演題発表してくれることを期待しています。(市川 聡)



学会報告② ～第40回日本造血細胞移植学会～

2009年から9年ぶりに冬の札幌で日本造血細胞移植学会総会が開催されました。雪まつりの準備が進む中、例年よりも一段と冷え込んだ2月の札幌でしたが晴れ間も多く気持ちのよい3日間でした。当院からは市川聡先生が「臍帯血移植が奏功したアグレッシブNK細胞白血病の1例」、大地哲朗先生が「再生不良性貧血に対するFludarabine+Cyclophosphamide+TBI 4Gyを用いた臍帯血移植」の発表を行いました。両発表とも、希少かつ難治性疾患に対して臍帯血移植が有効であることを示しました。一方で最近のトレンドである移植後大量シクロフォスファミド(PTCY)を用いたHLA半合致移植に関連した発表も多くみられ、開催地北海道大学からのPTCY関連の発表(Haplo 14-RIC)もプレナリーに選ばれていました。今後も、臍帯血移植、PTCYハプロ、ATGハプロ(兵庫医大式)の使い分けが重要になると思われます。それぞれにメリット、デメリットがあるため、年齢や疾患病期ごと

に最適な移植のアプローチを検討する必要があります。張替先生は3日目のシンポジウム「Innovative Concepts to Maximize Patient Outcomes」、大西は一般口演「チーム医療」の座長を担当しました。今後のTopicsとして、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫、急性白血病に対する新薬を自家移植や同種移植の前後にどのように用いるか、GVHDに対する新規治療薬開発、CMV感染予防薬の登場が考えられます。また、多職種および地域連携の推進もより重要視されるようになり、当科でも4月からHCTCとして石川祐子さん、秋澤友里さんの2名体制が稼働開始しました。東北大学もこれまでの経験を活かして、新たな移植にチャレンジしていきます。最終日、雪道を抜け少しの空き時間で頂いた本場のスープカレーは職人技が光る木村先生も納得の味でした。(大西 康)



3月某日 血液免疫科医局・病棟合同 “大”歓迎会



学会報告③ ～日本リウマチ学会総会2018～

4月26日から28日に東京国際フォーラムにて開催された第62回日本リウマチ学会総会にて、当科からは口演(W)4題、ポスター(P)4題の演題発表を行いました。

○ 白井 剛志 先生

W15-5「大型血管炎における合併症・併存症の検討」

○ 矢坂 健 先生 (岩手県立中央病院より)

P1-297「成人発症スティル病 (AOSD) に対するトシリズマブ (TCZ) 併用療法」

○ 石井 智徳 先生

W37-4「全身性強皮症に伴う難治性皮膚潰瘍に対する低出力衝撃波療法の有効性・安全性検証試験」

座長：ランチョンセミナー25, イブニングセミナー14, ワークショップ69

○ 鴨川 由起子 先生

W39-2「強皮症指尖潰瘍に対する対外衝撃波療法の分子的機序について」

○ 武藤 智之 先生

P2-229「高安動脈炎における再燃率とリスク因子の検討」

○ 佐藤 紘子 先生

P2-238「ベーチェット病における抗TNF製剤の有効性の検討」

○ 城田 祐子 先生

W77-4「膠原病性肺動脈性肺高血圧症(CTD-PAH)における予後予測因子と死因について」

○ 桑田 亮 さん (医学部6年生)

MSJR-P1-5「眼窩内腫瘍による視力及び眼球運動障害を呈した難治性多発血管炎性肉芽腫症 (GPA) の一例」

今年から、内科学会総会と同じく、リウマチ学会でも医学生による発表の場が設けられました。発表された症例のレベルはかなり高度であり、各施設が注力していることが感じられました。当科からは、これまでよりも多くの演題発表となりましたが、来年は更に意義のある演題発表を多く行い、本邦のリウマチ学の発展に寄与していきたいと思えます。(白井 剛志)



初の試みとなった全員懇親会：屋外に屋台の車が並びにぎわっていました



人事異動

この春の当科および関連病院の主な人事異動をご報告させていただきます。

【転出】

- 沖津 庸子 先生 (血液免疫科 院内講師 → 東北医科薬科大学 臨床検査医学・輸血部)
小林 匡洋 先生 (血液免疫科 助教 → 東北医科薬科大学 内科学第三)
那須 健太郎 先生 (血液免疫科 特任助手 → 大崎市民病院 血液内科)
大橋 圭一 先生 (血液免疫病学分野 大学院生 → 大崎市民病院 血液内科)
鈴木 琢磨 先生 (血液免疫病学分野 大学院生 → 日本海総合病院 血液内科)
永井 泰地 先生 (血液免疫科 医員 → 大崎市民病院 リウマチ科)

【転入】

- 小野寺 晃一 先生 (大崎市民病院 血液内科 → 血液免疫科 助教)
渡邊 正太郎 先生 (大崎市民病院 血液内科 → 血液免疫病学分野 大学院生)

【内部】

- 齋藤 慧 先生 (血液免疫病学分野 大学院生 → 輸血細胞治療部 医員)
鴨川 由起子 先生 (血液免疫病学分野 大学院生 → 血液免疫科 医員)
大地 哲朗 先生 (血液免疫科 医員 → 血液免疫病学分野 大学院生)

【外部】

- 長谷川 慎 先生 (山形大学 内科学第三 → 山形市立病院済生館 血液内科)
齋藤 陽 先生 (山形市立病院済生館 血液内科 → 国立がん研究センター中央病院 血液腫瘍科)

【入局】

- 川尻 昭寿 先生 (国立がん研究センター 造血細胞移植科 → 血液免疫科 医員)
矢坂 健 先生 (岩手県立中央病院 後期研修医 → 血液免疫科 医員)
中川 諒 先生 (虎の門病院 後期研修医 → 血液免疫科 医員)
古川 瑛次郎 先生 (山形市立病院済生館 初期研修医
→ 血液免疫科 医員 (後期研修))
石川 祐子 さん (移植コーディネータ)
千葉 薫 さん (事務補佐員)
佐々木 志野 さん (事務補佐員)

